

《書 評》

Michel Reddé, *Alésia: L'archéologie face à l'imaginaire*,

(Edition Errance, Paris, 2003, 209頁)

疋 田 隆 康

1

カエサルの手になる『ガリア戦記』のハイライト、ウェルキンゲトリクス率いるガリア人とカエサルの決戦の地アレシアは、ガリア考古学において極めて重要な位置を占めている。最初の発掘は、19世紀半ば、ナポレオン3世の指示によって行われたが、これは、フランスにおいて近代的な発掘方法が大規模に適用された最初の試みであった。アレシアは、その後も幾度か発掘が行われており、最新の発掘は、1991年から1997年にかけて、フランス、ドイツの共同で行われた。本書は、その発掘の際、フランス側の総責任者であった Michel Reddé氏が、最新の考古学的成果を基にアレシアについて書き下ろしたものである。Reddé氏は、École Pratique des Hautes Étudesのdirecteur d'étudesで、Histoire et archéologie des provinces frontalières de l'empire romainという講座を担当している考古学者であり、*Mare Nostrum: Les infrastructures, le dispositif et l'histoire de la marine militaire sous l'empire romain*, Paris, 1986など、特にローマ帝国の属州の軍隊に関する多数の業績がある。

本書は、バリー・カンリフ教授（オックスフォード大学）の序文と、著者の前書きに続く、3章から構成されており、さらにそれぞれの章が中見出し、及び小見出しに分けられている。第1章は、「ローマとガリア」と題され、アレシアの歴史的背景の解説に当てられている。まず、「共和政の終焉」では、共和政末期のローマの政治状況が略述され、続く「紀元前58年における内陸ガリア」では、紀元前2世紀から紀元前58年までの、ローマによるガリア征服の過程と、カエサルの遠征直前のガリアの状況が、「カエサルとその軍隊」では、カエサル時代のローマの軍制が解説される。その上で、「ガリアの征服」では、紀元前58年から始まるカエサルのガリア遠征（ブリテン島への遠征も含む）が、文献史料及び近年の考古学の成果から描き出されている。「アレシアの戦い」では、カエサル、デイオ・カッシウス、プルタルコスなどの文献史料から、アレシア攻囲戦が詳細に描かれ、カエサルとウェルキンゲトリクスの決戦の地、アレシアの場所の同定が試みられている。

第2章「アレシアを求めて」では、中世から今日までのアレシアを巡る論争を振り返り、アレシア問題の複雑さが浮き彫りにされる。「好古家たちの古き良き時代」では、先ず、

一般に信じられているようにナポレオン3世がアレシアを「創造」したのではない、と断った上で、アレシアの場所の同定に関する問題が扱われる。当時の創造であるのか、あるいは古代からの伝承によるものかは分からないが、カエサル『ガリア戦記』が再発見された9世紀前半には、アレシアはアリーズ・サント・レーヌ（Alise-Sainte-Reine）に同定されていたことが示される。14世紀のFlorentin Giovanni Villaniのフランス旅行の記述、16世紀の『ガリア戦記』の校訂本に付された地図などからも、中世以降、アレシアはアリーズ・サント・レーヌに同定されていたことが分かる。アレシアが古くから知られていたのに対し、今日のようにウェルキンゲトリクスが人気を博するようになるのは、19世紀になってからのことである。特に1828年刊行のアメデ・ティエリ『ガリア人の歴史』と、1837年から1854年にかけて刊行された、アンリ・マルタン『フランス史』の影響によるところが大きい。

1855年までは、アレシアの戦いの場所は、何の問題もなく、アリーズ・サント・レーヌに同定されていた。この年、ブザンソンの建築家アルフォンス・ドラクロワが、アレシアはブルゴーニュ地方のアリーズ・サント・レーヌではなく、フランシュ・コンテ地方のアレーズ（Alaise）であるという説を提出してから、アレシアの位置を巡る「故郷論争」が巻き起こされた。ジュール・キシュラ（1814-1882、中世古文書学の専門家、特にジャンヌ・ダルクに関する史料集編纂で知られる）などがドラクロワに賛同し、論争は激化していった。この論争は、1861年から1865年にわたって行われた、ナポレオン3世によるアリーズ・サント・レーヌの発掘の成功により、事実上の決着を見た。さらに1952年から53年にかけて行われたアレーズの考古学調査によって、この地がケルトのオッピダではなく、中世の遺跡であったことが示され、アレシアがアリーズ・サント・レーヌであることは決定的となったが、現在でもアレーズには火種が燻っている。

「国家考古学の最初の大規模な業績」では、ナポレオン3世によるアレシアの発掘について詳述される。ナポレオン3世は、発掘のための準備として、1858年にガリア地誌委員会を作り、アレシアの場所を調査させた。委員会の調査に基づき、1861年、オソワ山の麓、アリーズ・サント・レーヌを発掘することが決定され、同年4月21日から発掘が開始された。発掘中は、進展状況が日々ナポレオン3世に報告されただけでなく、ナポレオン3世自らしばしばアリーズ・サント・レーヌの発掘現場を訪れている。この発掘は、1865年8月27日にこの地にウェルキンゲトリクスの像が建てられて終結した。この時の発掘報告は、Napoleon III, *Histoire de Jules César* 2vols., Paris, 1865-66として刊行されたが、本書にはその報告の図版も多数収録されている。

1870年、普仏戦争での敗北とアルザス・ロレーヌ地方の喪失は、フランスのナショナリズムを刺激し、紀元前52年の敗北と1870年の敗北とが重ね合わされ、ウェルキンゲトリクスはゲクラン（百年戦争時、シャルル5世の下で活躍した将軍）やジャンヌ・ダルク、ナポレオン1世と並ぶ英雄に祭り上げられていく。「ウェルキンゲトリクス、最初のフランス

人」として。この時代のフランス・ナショナリズムの最も象徴的なものは、現在クレルモン・フェランの美術館に所蔵されている彫像であろう。そこではウェルキンゲトリクスとジャンヌ・ダルクが手を握っている。これに対する、ドイツ側の反応として、歴史家テオドル・モムゼンの例が取り上げられる。モムゼンは、普仏戦争前には、フランスの学者とも交流があり、『ローマ史』第1巻(1854年)は1863年にフランス語訳が刊行されている。フランスの誇りに対して、モムゼンは皮肉と侮蔑を隠そうとはしない。1882年から1883年に、ベルリン大学のモムゼンの下で学んだカミーユ・ジュリアン(1859-1933、コレージュ・ド・フランス教授)は、後年、モムゼンに対し、反論を書き送っている。本章の末尾「アレシア論争あるいは素朴な考古学への永遠回帰」では、再びアレシアを巡る論争が取り上げられる。まだ近年でも、アリーズ・サント・レーヌに反対し、アレーズの他に、アレシアを別の地に比定する説が存在する。その中の、ジュラ地方の2つの地、サラン・レ・バン(Salins-les-Bains)とシャン・コルヌ・ショー・デ・クロトネ(Syam-Cornu-Chaux-des-Crotenay)の例が紹介される。特に後者は、1960年代から繰り返し考古学調査が行われており、その出土物はガロ＝ローマ時代以前の物ではないことが分かっているにもかかわらず、この説を唱える人々は未だにその主張を引っ込めようとはしない。

以上の記述を踏まえて、第3章「アリーズ・サント・レーヌの考古学資料」では、最新の発掘成果が紹介されている。先ず、「ガロ＝ローマの発掘の1世紀」では、アレシア、すなわちアリーズ・サント・レーヌの発掘調査の歴史が述べられ、1991年から1997年にかけて行われた発掘の位置づけが示される。アリーズ・サント・レーヌでは、ナポレオン3世の発掘以前にも18世紀後半から小規模な調査は何度か行われている。1905年からはエミール・エスペランデュール(1857-1939)による発掘、1958年からはジョエル・ル・ガル(1913-1991)による発掘など、2度の世界大戦などにより、多少の中断はあるものの、20世紀にはほとんど間断なくオソワ山周辺の調査が続けられてきた。「地誌と自然環境」では、航空写真などを用いながら、オソワ山周辺の地形と環境について記述される。「オッピダのガリア人について」では、主にアレシアのオッピダとしての防御施設、特にガリア式城壁について、その構造、作り方などが詳述されている。「カエサルの陣営」では、ローマ軍の陣営について説明される。アリーズ・サント・レーヌでは、主要な陣営として、それぞれABCと名付けられた3つの陣営と若干数のより小さな陣営が見つかっている。これらのうち、陣営Cは残存状態が最も良く、7.3ヘクタールを占めている。この陣営は、最近の調査の結果、ラビエヌスの陣営と考えられている。陣営Bについては、この陣営は陣営Cよりやや大きく、陣営Cの向かい側に位置しており、その場所がカエサルの記述とも一致するため、カエサルの陣営ではないかという解釈が提示されている。アレシアの戦いでは、カエサル率いるローマ軍はウェルキンゲトリクス率いるガリア軍の立て籠もるアレシアを包囲したが、その際にローマ軍が建設した、堀や壁などの包囲施設については、続く「包囲線」で語られる。アレシアのガリア人、ローマ人の施設を一通り見た後、最後にアレシアの出

土品が紹介される。「物質と年代」では、フィブラ、コイン、武具などのアリーズ・サンクト・レーヌからの出土物について、その年代が考察され、ナポレオン3世の発掘時に推定された年代が、基本的には正しいことが確認される。

2

ところで、2005年4月18日、19日の2日間にわたって、「アレシアとトイトブルクの戦い」と題するシンポジウムが、パリのドイツ歴史協会において、École Pratique des Hautes ÉtudesとRömisch-Germanische Kommissionの共催で開かれた。このシンポジウムは、フランス、ドイツ、ともにローマとの戦いが国家の起源神話に置かれており、戦いそのものと、その後の歴史の中で果たしてきた役割とを比較することで、改めてアレシアの戦いとトイトブルクの戦いの意義を問い直そうというものである。全体は3部に分けられ、1日目は、「『国民』の地」というテーマで、10本の報告が行われ、2日目は、午前中に「考古学的遺跡の歴史的解釈」というテーマで、5本の報告が、午後には「戦場の遺跡をどのように解釈するのか?」というテーマで4本の報告が行われた。そして最後に、クロード・ニコレ(1930-、フランスのローマ史研究の大家、特に共和政期の騎士身分に関する大著で知られる)が総括を行い、締め括った。1日目の報告では、フランスにおいて、ウェルキンゲトリクスが、ジャンヌ・ダルクやナポレオン・ボナパルトと並ぶ救国の英雄に、さらに1870年以降には、ビスマルクがカエサルに、ナポレオン3世がウェルキンゲトリクスになぞらえられ、ウェルキンゲトリクスがフランスの象徴へと祭り上げられていく過程、ドイツにおいて、アルミニウスあるいはヘルマンが同様に英雄に祭り上げられていく過程、アレシアとトイトブルクの森が「記憶の場」となっていく過程が、教科書、新聞、芸術作品など、当時の様々な史料に描かれたイメージから多面的に分析された。2日目は、アレシア、トイトブルク、それぞれの近年の発掘成果の報告が中心であった。本書の著者Reddé氏は、1日目に「アレシア論争：昨日と今日」という発表を、2日目の午後には「アレシア：カエサルのテキストから考古学的足跡へ」という発表を行ったが、前者では主として19世紀半ばから20世紀初めのアレシアの場所を巡る論争を紹介し、後者では、アレシアの戦いに関する古典史料の食い違い、特にその地理に関する矛盾を取り上げ、考古学資料と対照し、文献史料の抱える問題点を指摘した。前者は本書の第2章で、後者は第1章末尾の「アレシアの戦い」で扱われている問題である。

このシンポジウムの1日目のテーマは、本書の第2章と対応しているが、本書では、ほとんどアレシアの場所の同定の問題に限定されている。もちろん本書はアレシアを巡る問題を網羅することを意図しているわけではない。しかし、時々問題を単純化するきらいがある。シンポジウムで報告されたことから例を挙げてみよう。ギリシア・ローマの古典文献では、ケルトとゲルマンの区別は曖昧で、しばしば混同されているが、これを厳密に区

別するようになるのは、フュステル・ド・クーランジュからで、これは彼の反ドイツ、反ゲルマン主義と無関係ではないことが指摘されたし、モムゼンの政治的立場、特に彼の反フランス主義についてもより突っ込んだ議論がなされたが、本書では簡単に触れられているだけである。また、フランスの起源として、ローマとゲルマン（フランク）は中世から挙げられているが、ガリア起源が特に強調されるようになるのは、アメデ・ティエリの『ガリア人の歴史』からである。彼の兄オーギュスタン・ティエリは、弟とは異なり、ローマ、ゲルマン起源を支持している。弟ティエリの『ガリア人の歴史』はフランス語で書かれた最初のガリア史であるが、やはり本書ではトピック的に扱われているに過ぎない。もっとも、ウェルキングトリクスを扱った書物は何冊も刊行されている上、フュステル・ド・クーランジュに関しては、いくつかの論考（F. Hartog, *Le XIX^e siècle et l'histoire: le cas Fustel de Coulanges*, Paris, 1988、Fustel de Coulanges, *La Gaule romaine* avec introduction par H. Lavagne, Paris, 1994に付されたアンリ・ラヴァーニユの序文など）があり、アメデ・ティエリやカミーユ・ジュリアンについては『記憶の場』でも取り上げられているので、本書では敢えて割愛したのかもしれない。

ウェルキングトリクスとアレシアを巡る問題とは、重なる点も多いが、必ずしも同一ではない。先ず古代史における重要性が全く異なると言ってよい。ウェルキングトリクスはガリア戦争の末期に登場するだけであり、カエサルはウェルキングトリクスに関する記述は多かれ少なかれ美化されている。それに対し、紀元前52年以前のアレシアは、マンドゥビ族の小さなオッピダに過ぎなかったが、ガリアがローマに平定された後も存在し続け、ガロ＝ローマ期には、アレシアには6つの聖域が存在していた。これらの聖域とその伝説のために、アレシアはガリア・ルグドゥネンシスのいわば宗教都市と見なされていた。本書では、アレシアの戦いの背景は解説されているが、紀元前52年以降のアレシアについては残念ながら触れられていない。

このように、本書は、単に最新の発掘成果を提示するだけではなく、アレシアの戦いに至る、古代の歴史的背景、及び中世以降、20世紀末の発掘までのアレシアを巡る論争も含み、アレシアに関する問題について総合的に考察を加えている。また所々に様々なトピックがコラムとして挿入されることで、より立体的にアレシアについて理解出来るよう配慮されている。著者の専門を考慮すると、第3章がやや物足りない印象を受けるが、現時点では、アレシアに関して、バランスの取れた最良の研究書と言えよう。考古学的データの詳細に関しては、フランス・ドイツの共同で行われた発掘の報告が、M. Reddé&S. von Schunurbein(eds.), *Alésia. Fouilles et recherches franco-allemandes sur les travaux militaires romains autour du Mont-Auxois(1991-1997)* Mémoire de l'Académie des Inscriptions et Belles Lettres XXII 3vols., Paris, 2001として刊行されており、こちらを参照することで補うことが出来る。また、巻末にはorientation bibliographiqueが付され、基本的な文献がコメント付きで紹介されており、有益である。古代史の研究において、考古学の成果の重要性は認識さ

れているが、考古学の方法論を学んでいない文献学に基づいている歴史研究者にとって、それらの成果を十分に消化し研究に役立てるのは容易ではない。本書のような、最新の発掘成果を分かり易く示してくれる書物は頗る便利である。

本書の冒頭で、Reddé氏はある国際会議で発表した時のこととして次のように述べている。発表が終わり、質疑応答が始まると、考古学者の側からはすぐに質問や意見が出たのに対し、文献学者の方は沈黙したままであった、と。評者はこの時の発表を聞いてはいないが、評者自身の経験から言えば、確かに考古学者の研究発表に対し、文献学者の方からは意見が出にくい傾向はあるものの、考古学者のプレゼンテーションに必ずしも問題がないとは思われない。従って、Reddé氏の意見を全面的に支持するつもりはない。しかし、研究の中心を「文字」に置くか「もの」に置くかを選択した上で、専門としない方の史料に対しても真摯に向き合うことの出来るだけの能力が必要とされるであろう。モムゼンはコインを基にトイトブルクの戦いの場所をオスナブリュック近郊と推定することが出来た。ある研究者は、ガリアの研究は哲学の研究に似ている点があると言う。哲学の研究がプラトンへの注釈であるように、ガリアの研究はジュリアンの『ガリア史』（1908-1926年）への注釈である、と。20世紀初めにアレシアを発掘したエスペランデューは、優れた碑文学者でもあった。博識だけが誤りをより少なくすることが出来るという、200年以上前のギボンの言葉をもう一度思い出す必要があるのではないだろうか。